

祖母 《そぼ》

楠山正雄

青空文庫

一 青めがね

一雄は小学校へ行くようになって、やっと一月立つか立たないうちに、ふと眼病をわずらって、学校を休まなければならなくなりました。

それから毎日、一雄はお医者さまからくれた青い眼がねをかけて、おばあさんと二人——まだ電車のない時分でしたから——合乗の人力で、眼科の病院へ通いました。

「食べものに気をつけて上げて下さい。この子の眼は大たい胃腸のわるいせいなのだから」。

お医者さまはこうおばあさんにいいました。

「白い身の魚ぐらいに、なるべくお粥がよろしい。」

二三日はお粥もめずらしかったし、おばあさんが三度々々小さなお鍋で煮てくれる半ぺんやお芋がどんなにおいしかったでしょう。青い眼がねをかけて食べると、何もかも青く青く見えました。

「青いな、青いな、何を食べても青いや。」

一雄はおもしろがつて、お膳ぜんの上を箸はしで突ツつきまわしていました。ちょうど梅雨つゆの时分で、お天氣のわるい日がよくつづきました。そのうち毎日雨ばかり降るようになりました。

一雄の気分がだんだん重苦しくなつて、眼の奥がしくしく痛む日がつづきました。青い眼がねで何かを見るのが、うつとうしく、じれったくつて、悲しくなるほど不愉快でした。食物たべものに好ききらいをいう、というよりは、あれもいや、これもいや、のべつに「いや、いや」とばかり、一雄はいいつづけていました。

「僕、何でも青くつて食べても旨うまくないんだもの。」

「じゃあ御膳ごぜんの時だけ眼がねをお取り。」とおばあさんはいいました。

眼がねを取つても、しばらくはやはり何かが青く見えました。やつと白い光に慣れると、こんどは眩まぶしくつて、眼にしみるような劇はげしい痛みを感じました。

「やはり眼がねをかけなければだめなんだよ、おばあさん。」

あんまり一雄が何も食べないので、おばあさんは心配して、瀬戸物やから小さな瀬戸物の玉子焼鍋たまごやきなべを買つて来ました。

このお鍋の形が大へん一雄を喜ばせました。

「これ何にするの、おばあさん。」

「玉子をやくのだよ。」

「こんなもので焼くの、おもしろいなあ。」

「これで玉子焼をこしらえてあげるが、食べるかい。」

「ああ。」

いつもになく一雄が食べたそうな様子をしているので、おばあさんはどんなに喜んでしょう。

その日の夕方、一雄が茶の間の隅^{すみ}つこで、いつまでかかってもほんとうに出来ない積^つ木細工^{みきざいく}のお家を建てたり、こわしたりしている間に、おばあさんはせつせと玉子焼のしたくにかかっていました。

明りがついて、お膳^{かあ}が出ると新調の可愛らしい玉子焼のお鍋が、一雄の小さなお膳の上にのっていました。

「ほら、あけてごらん、それはおいしそうに出来たから。」

一雄が瀬戸物の蓋^{ふた}をあけると、ぷんとやわらかな少し焦げくさい、旨^{にお}そうな匂いが立ちました。

「まだあつかしら。」

こういいながら、めずらしくにつこりして、一雄は玉子焼の中に箸を突ツ込みました。おばあさんにもこにこしながら、

「ああ、ゆつくり、たんとおあがりよ。」といいました。

でも一口、玉子焼を口に頬ほべると、一雄は急にいやな顔をして、すぐはき出してしまいました。

「ああ、臭い、僕いやだこれ、お酒くさいから。」

一雄は泣き出しそうな顔をしていました。

「お止よし、お止よし。厭いやなら上げないから。」

おばあさんはこういつて、いきなり玉子焼のお鍋をとり上げて、中身をそっくりお庭に投げ棄すててしまいました。ちょうど通りかかったポチが見つけてみんな食べてしまいました。

なぜおばあさんがこんなにおこったのか、一雄にはわかりませんでした。おばあさんもなぜそんなに腹が立つのか、自分でもわかりませんでした。

二人はお互いにかっかりして、気の毒になって、このおばあさんと、孫とは、別々の心

持でしくしく泣き出しました。

二人の半日楽しみにして待まちも設けた晩御飯はめちやめちやになりました。

おばあさんはお酒の好きな人でした。せつかく孫の口を甘うまくしようと思って入れた幾滴かのお酒が、まるつきり予期しない反対の結果を生んだのでした。それを知って、一雄は余計悲しくなりました。

二 花ガルタ

一雄の家に奉公していた小僧で、器用に画えをかく子がありました。

或ある日この子は大きな鳥とりの子の紙をどこから買って来て、綺麗きれいにボール紙に貼はりつけて、四十八に割った細い罫けいを縦横たてよこに引いて、その一つ一つの目に、十二カ月の花や木の細かい画を上じようず手にかきはじめました。

一雄はどんなにそれが欲しかったでしょう。

「貞吉ていきち、貞吉、出来たらおくれ、ね。」

貞吉というのは、小僧の名でした。

「でもこれはまだほんとうに出来上^{できあが}っていないんですからね、すっかり出来あがったら上げましょう。」

「だっていつのことだか知れないじゃないか、いいからそれをおくれよ。」

「だめですよ、まだ彩色^{さいしき}もしてないし……」

「いいよ、彩色なんか僕自分でするから。」

「そんなわがままをおつしやつてはいけません。あなたに彩色ができるものですか。」

「でかい、でかい。おくれってばよう。」

貞吉はそれでも手離そうとはしませんでした。書きのこした桜の花や、鳥の羽^はの手入れに夢中になっていました。一雄は、とてもだめだと思うと、おどかしの積りでしくしく泣^なき出^だしました。そのうちほんとうに悲しくなつて、おいおい泣きながらお茶の間へ駈^かけ込んで行きました。

「どうしたの。」

おばあさんはもう目の色を変えていました。

「貞吉が、貞吉が……くれないんだ。」

貞吉は茶の間へ呼ばれて、さんざん叱^{しか}られて、理^{わけ}由はなしに、丹精した花ガルトの画を、

半できのまま取上げられてしまっていた。美しく描かれた梅や牡丹や菊や紅葉の花ガルトは、その晩から一雄の六色の色鉛筆で惜しげもなく彩られてしまっていた。

明くる日の朝、赤や青や黄に醜く塗りつぶされて見るかげもなくなっている貞吉の花ガルトは、もう一度一雄の鋏でめちやめちやに切りこまざかれて、縁側から庭に落ち散っていました。

「まあこんな紙屑をお出しになって、坊ちゃんはいけませんね。」

その昼すぎ、女中の清はぶつぶついながら、掃き出していました。たった一枚松に鶴の絵のカルトが、縁先の飛石の下に挿まったまま、その後しばらく、雨風にさらされていました。一雄はその日からもう花ガルトのことを思い出しませんでした。

十日ばかり後のことでした。一雄は縁先で遊んでいる内ふと見る気もなしに石の間に挿まって、皮が剥けてボール紙ばかりになっているカルトを一枚見つけました。急に花ガルトが惜しくなってきました。

貞吉はおこっているに違いない、貞吉に悪かった、一雄はそう思って何だか悲しくなりました。

青空文庫情報

底本：「赤い鳥傑作集 坪田譲治編」新潮文庫、新潮社

1955（昭和30）年6月25日発行

1974（昭和49）年9月10日29刷改版

1984（昭和59）年10月10日44刷

初出：「赤い鳥」大正10年3月号

入力：鈴木厚司

校正：林 幸雄

2001年3月28日公開

2001年4月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

祖母《そぼ》

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>